



呆性高齢者を含む健常者約 1363 名からの「音楽の意識調査」を集計し、世代別音楽ジャンル嗜好度を把握した。次にこの調査から得られた高嗜好度の楽曲に関する音楽の数理的構造を分析した。第 2 章で得られた基礎的知見は第 II 部第 4 章の脳波測定による生理的研究における聴取楽曲を選択する上で、さらに第 III 部第 5 章および第 IV 部第 6 章の音楽療法の評価研究を効果的に進める上でも活用できるものであった。

第 II 部第 4 章では、筆者の行った継続的な音楽療法のセッションに参加した痴呆性高齢者の中から、楽曲の聴取時および聴取後の脳波測定を行い、痴呆性高齢者に対する音楽療法の効果に関して生理的指標を分析した。被験者は重度痴呆性高齢者（7 名）と中軽度痴呆性高齢者（7 名）である。聴取楽曲は、これまでの音楽療法のセッションで最も反応の良好であった民謡「斎太郎節」、童謡「夕やけこやけ」、唱歌「荒城の月」を、同じく音楽療法のセッションで計測した各個人の「固有テンポ」と非固有テンポの 2 種類で提示した。その結果、重度痴呆性高齢者と中軽度痴呆性高齢者における「固有テンポ」および非固有テンポによる楽曲の聴取時と聴取後の脳波パワースペクトル値の相対比 (RRPS) について、重度痴呆性高齢者の「固有テンポ」による民謡「斎太郎節」聴取時に、有意差が認められた ( $p < 0.001$ )。すなわち、右頭頂部—後頭部において  $\alpha$  帯域の増加がみられた。一方、中軽度痴呆性高齢者では、「固有テンポ」および非固有テンポによる楽曲聴取時と聴取後に、有意差が認められた ( $p < 0.05$ )。すなわち、左右の前頭部・中心部・頭頂部・後頭部の各部位において  $\theta$  帯域の増加がみられた。したがって重度痴呆性高齢者に対しては、音楽療法のセッションにおいて「固有テンポ」による提示が効果的であり、中軽度痴呆性高齢者に対しては、音楽の調整力が重度痴呆性高齢者より残されていることから学習の可能性が示唆された。

第 III 部第 5 章では、痴呆性高齢者に対する音楽療法において、「固有テンポ」を用いた集団セッションと個人セッションを実施した 3 事例について検討し、新しい楽曲に対する学習および相互の人的コミュニケーションの可能性について論じた。

第 IV 部第 6 章では、二大痴呆疾患である脳血管性痴呆とアルツハイマー型痴呆の各事例をとおして、ターミナルケアにおける「固有テンポ」による音楽療法の有効性を生理的および行動的に評価した。その結果、生命活動が途絶える死亡直前まで、「固有テンポ」による音楽療法を実施することができ、相互の人的コミュニケーションが可能であることが示唆された。

第 V 部第 7 章では、各章で得られた知見を総括するとともに、本研究の独創性および今後の課題について述べた。本研究の独創性は、筆者がみいだした「固有テンポ」を用いた音楽療法を実施することは、痴呆性高齢者の脳機能に変化を与える可能性があること、および学習能力や相互の人的コミュニケーションを発展させる可能性があることが示唆されたことである。今後の課題としては、「固有テンポ」と呼吸数や歩行速度との関係、また軽度痴呆性高齢者に対する学習能力や調整力の維持や向上に関する研究が必要であると考えた。

## 論文審査の結果と要旨

音楽療法が経験的にはなんらかの効用あるいは治療的な効果があることは論を待たないと思われる。しかし、音楽療法についての実証的な研究は、医学、音楽学、心理学、教育学など学際的なアプローチが必要なため、これまで充分になされてきたとはいいがたい状況にある。そういった中で、本論文は音楽療法に関して行動的および生理的な指標を用いて実証的に研究したものである。筆者は音楽療法の専門家であるが、行動的および生理的指標に関する研究法を真摯に学び、それらを自らの実践に適用して、包括的に研究し結実させたものが本論文である。さらに、筆者が長年の音楽療法の実践からみいだした「固有テンポ」の妥当性・有効性について検証性を試みている。

本研究の成果は、重度痴呆性高齢者に対しては、音楽療法にさいして「固有テンポ」による提示が効果的であり、また中軽度痴呆性高齢者については、音楽の調整力が重度痴呆性高齢者より残されていることから学習の可能性があることが示されたことである。さらに、この研究で用いた「固有テンポ」は、人間各人がもっている自発的に発現されるテンポであるため、音楽療法の適用などについて評価する有効な指標になりうることが示唆された。

本論文については、対象とした痴呆性高齢者の例数が多くないこと、「固有テンポ」についての理論的考察の深まりが必ずしも十分ではないことなどが指摘される。しかし、痴呆性高齢者を対象として生理的指標を精密に記録することの困難さを考慮すると一定の成果を得たと考えることができる。また、「固有テンポ」は、従来の精神テンポの概念を発展させたものであり、さらに呼吸数や歩行速度との関連も想定され、きわめて大きな研究テーマで今後の課題といえることができる。

したがって、本論文は音楽療法の効果について行動的および生理的な指標を用いて実証的に示したこと、および筆者がみいだした「固有テンポ」の音楽療法への応用および理論的考察は、音楽療法およびその関連領域にたいして学術的に多大の貢献をしたばかりでなく、介護・福祉などの実践にたいしても実証的な基礎的根拠を提供できたと評価することができる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。